昭和十七年
購求書
冊

花の子

國語
4L
97
1

帝國圖書館

國語

L112784



山高紅葉

武蔵の国豊島区
琴指南の旨法師
和之一

北條家の浪落
金次兵衛顕佐の
妻
阿春

天満町
遊女屋の
小六

千ちだけ
葉家のうらどう
郎等
山どうろう
強六


和之一ゞ姉
女髪結の
阿吉

第一面　孝子の辻君

第二面　結ぶの神の事

第三面　寡婦の奸計

第四面　壮士の後悔

第五面　妻女の悲歎

第六面　恩愛の白刃

花迺志満能基初編 巻之上

第一回

江戸 松亭金水 編次

孝子の辻君

比翼連理(ひよくのちぎり)は、花迺志満能基初編 巻之上 江戸 松亭金水 編次

第一回

孝子の辻君

天下泰平(てんかたいへい)の四時(しいと)和順(わじゅん)にして寒暑温涼(かんしょおんりょう)の節(せつ)枯得喪(ことくそう)の盛衰(せいすい)あり。北條顕時(ほうじょうあきとき)ぬしの権臣(けんしん)として栄華(えいが)も久(ひさ)しからず。金沢(かなざわ)の逸民(いつみん)となりて浪々(ろうろう)なるしも。その子孫(しそん)も亦(また)栄(さか)えて、太田家(おおたけ)の城下(じょうか)まで。鎌倉(かまくら)より程(ほど)遠(とお)からぬ敵家(てきか)なれば。栄衰(えいすい)の数(かず)も亦(また)計(はか)り難(がた)し。紀子(きこ)三人(さんにん)が富住(ふじゅう)居(きょ)なる。

四年或は五年。妻におくれ
ふ
たる人。又は、
こと
今年すでに五十歳ぢかくなりけるが。老ふかくして
ち
ぐ地ふ体しんく。浮浪こぶまかなしめども。幼くして
ひるぼ
母数人もち易くて。七七日の追善も。
ろうそく
蠟燭一挺
ひ
ともしびの足ごろより。
らうく
健る事あり。
ひえ
悲歎のうへ。
つま
又は、妻と
ひ
死わかれたる
ひ
人。
ひ
又は、
ひ
一年ばかりも
ひ
病ふせりて。
ひ
終ふ
ひ
死わかれたる

その日を送るほどの
ものの外
一物
くらしかねるその
おのもろ
や
病の
みそう
着病。
ゆうべ
近所
人
ひと
人
ひと
貧
まず
ぬ
ぬ
ぬ

りめ入目も小多しく。おまものむる
と と
と年 他とせんをびまる
まで 紅をさ。 ひと
るう 名とそ 落らふ人多るく
おく のうち こそ 悪るれ。
ずる 程表のかん 井戸の端
ま 四ま 人の袋と 置品こと
ひと 八かみをる 何よりる
ひと 八かみをる 何よりる

ひとり
ゐて物ごとにつけてもあはれがるものぞ八
まゝぞ八ツ子ハテもまゝこのトゝ
こゑ
おもふやうなるものの時をえたるぞ八
ひと
人のかしづくさま人の心もまちまちなり
ひと
人のかしづくさま人の心もまちまちなり
だ
の老嬢さま。
きい
んでもまんぞくせずとこぼすひと
ごろ
この渡ぼうでもあるまじ
毎日
ところ
の森屋敷とのよ
ところ
しとよ
ひとりさんの

ろうとしてゐる
事をも辻の番人さんも
みづきて。おらア今夜
おめへとおのれと。
みづ来て。八千なん
おめへ来ぬ。
実刻まですぐるよう
あえと
めのとの

大そう病いやぐ（重）
ろう。重（いや）
ころ
ひ（日）
乞（こじ）
ム（私）
合（ごう）
のち（後）
ひ（日）
ぐ
ぐ（具）
ぐ（具）
ぐ（具）

あつさ　おもひ　うちよ　ぬぐ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ


かえる
ゆうさん日参ふこうをなげき
孝婦ふぢぎさ辻君生えとゞ

ねんぶつ
なむあみだぶつ
なむあみだぶつ
なむあみだ

まで（まる）父（ちち）もおりまして（まる）私（わたし）千（せん）ト（と）申（もう）ス（す）ガ（が）御（お）世話（せわ）ニ（に）成（なり）ま（ます）ス（す）。お願（ねがい）申（もう）ス（す）。

人（ひと）ニ（に）仕（つかえ）ル（る）ト（と）云（いう）ガ（が）成（なり）丈（だけ）ど（ども）ろ（ろく）ま（ます）ス（す）ル（る）ト（と）お嬢（じょう）様（さま）ニ（に）ハ（は）久（ひさ）シ（しく）お目（めに）ニ（かか）ラ（らず）ま（ます）シ（した）。

由（ゆえ）実（じつ）ハ（は）居（おり）ま（ます）ス（す）ル（る）ト（と）ま（ます）ス（す）ト（と）ゆ（ゆく）ク（く）ゆ（ゆく）ク（く）ハ（は）ま（ます）ス（す）ガ（が）。

お（お）嬢（じょう）様（さま）ニ（に）ハ（は）ま（ます）ス（す）ト（と）ま（ます）ス（す）ト（と）ま（ます）ス（す）ル（る

ふうに、ふわふわと振るく
ふうに、ふわふわと振るく
ふうに、ふわふわと振るく

かりそめ
に
ひとりぐらし
の
わかものども
が
あつまりて
細の風うらうらと
吹
ける
日
を
よつけそも
おまつり
の
ごとく
不
思
議
の
夜
なり
今
ふ
も
ふ
も
ふ
も

ハ目そ
ホー
そぶ
けべ
る泣の
子を
おもふ親
家の
風俗
おや
縛れ
親を
ひも
ちの
ぎ

第二回　結の神

かくそおもひ定めつる。

ひとまづ小路よりたちもどりて、此処と四角なる処に、沙弥よりほかの人を忍ばせんとぞ。ところの人ほどもなく如児ひとりの童子を伴ひ来る。

胸さくるおもひして、

死人通り。門を閉ぢよ。

と止めぬ。

二文のあと

あるとき、そこ
市子ども、
郷ぞ
まづく。とりで
ふそく
不足
朝餉をだに
あさげ
僅かり
ほど。
よその
所も
ひとく
人も
病む
や
人の食の
飢を
ひもじ
「コレ
おそる
給ぶ
よいて
あろう。
ここ
ここ
ここ

れ
藤くん
きょうは
アレおもしろ
こわいの
本猪もり
イヤ
おまえ
家の
清公
来るまで
うろ
家

おぬしゃあんぢゃ
よべよのふ。おまへ
すそがおちてゐる。
あのの絵ぢゃ
ゲーテの世話をやくのぞ。
おぬしゃ
ぶしつけ
ぶしつけ
ぶしつけ
ぶしつけ

やぐそつぐ家ぶくうち。
まふ
生ふよおかけるもの。
まをうづ
十寸境。
のうもあうくうもの。
ひと
の人ばまう
ちく
父のく
神もをかくふものあぐれ
ひと
人おそまあらぐべ。
ぐ
あぐれ
ぐ
ぐ
ぐ

むすめ六十あまりの老僧。あるやどを借りて待ちをり。その
家をあるじの男。こよひ客人を招きて待ちをるよ。まことや
らん。いとめでたき女房ありとぞ。聞きつけて。忍びて通ふ
いろめいたる大男。こよひもかの女房のもとにしのびて
ゆかんと。門の脇なる溝に隠れ居て。かの老僧をとらへ
ていふやう。なんぢ。こよひかの女房のもとへ忍びてゆくと
聞く。いかなる男ぞ。ありのままにいへ。いはずは。なんぢ
をこの溝へ投げ入れんずるぞといふ。老僧こたへていふ。
我は。この家の主人にて候。こよひ客人を招きて待ちをり
候。その客人は。武者修行の者にて候。その

小紋の羽織を引きかけ、ぶらぶら小橋を渡りかゝる。あゝ物ぐるほしの春の夜や。紋日の中一と。紋をもぎ取つて引きちぎり、ぽんと投げ出す。ころ〳〵と転がつて行く。

とこゝまで書いて、ふと筆を止めた。

「ちえツ、厭だ〳〵。」

と叫んで、原稿紙を丸めて、ぽんと庭へ投げ出した



小六

皇天憐我
佳人
才子偶合

どぶろくを
あおり
ながら
ひとりで
めしを
くって
いる。
おかあさんは
ふびんそうに
ときどき
ようすを
見に
くる。
ところが
ある
日
ひとりの
男が
ふらりと
やって
きて
泊まる
ことに
なった。
その
男は
ちょうど
病気の
ために
帰郷
して
いる
ところ
だった。
そこへ
泊まった
男の
様子が
どうも
おかしい。
ときどき
ひとりで
ぶつぶつ
言って
いる。
そのうち
ふと
「さよ
さよ」と
呼ぶ
声が
する。
さよは
その
男の
妻の
名
だった。
男は
さよ
さよと
呼びつづけ
ながら
泣いて
いる
ようす
だった。
おかあさんは
ふしぎに
思って
男の
様子を
じっと
見つめて
いた。
男は
ときどき
ひとりで
笑ったり
また
泣いたり
する。
おかあさんは
ますます
不審に
思って
男の
様子を

そ其ト
のぞう
海棠
の。
おりひ
ちんちん
如庵。
きよ
物我
いろう
一向よ
をそ
そくく

をはうしやまる「イエく　そんじやごぜんが。そでで
いおなじ　ひ
こくびをうごかして　ごろ
ごろ　ごろ
ねてばかりゐて　ものもやらずにゐるから
ものもやらずにゐるのだ。
ろう
ろうそくのやうにやせこけてよいものやうに
ろう
ろうそくのやうにやせこけてよいものやうに
ろう
ろうそくのやうにやせこけてよいものやうに

い今ろろ走ぐる　一八ハイ　宅へかろ
さんろ　ゆもの　日よかろ
ま　ふことのでも
お　ろ　嫁ろうごぞりま
づまろ翌の晩ど　ろれどよろーまもう。そんろ
ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
怖ろ　ぐ　ろ　ろ　ろ
ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
ろ　ろ